2018 年度ＧＴセミナー
第 47 回保育環境セミナー
2018.7.9 ～ 7.11 前編

第７２号　２０１８年7月１６日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

第 47 回保育環境セミナー

2018 年 7 月 9 日～11 日に第 47 回保育環境セミナーが
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から 150 名程の先生方が集まり、各園の実践発表や園見学、
意見交換会を 3 日間に渡り行いました。

1 日目　2018 年 7 月 9 日（月）

10：00～　園見学
13：30～　見学園紹介
15：00～　ＧＴ活動報告
15：00～　休憩
15：30～　講演
17：15～　意見交換会

2 日目　2018 年 7 月 10 日（火）

9：00～　実践園報告
9：30～　見守る保育の 5 つのポイント
11：45～　ミマモリングソフト紹介
12：00～　昼食
13：00～　ドイツ報告
14：00～　Ｑ＆Ａ
15：30　終了

3 日目　2018 年 7 月 11 日（水）

10：00～　園見学

基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

―はじめに―

みなさんこんにちは。さっきまで中国にいたとは思えないくらいだが、海外進出は考えていません。ただ、日本がなかなか保育を変えないことが多いので、海外の方が先に変えようとしている、と言うことを言って日本をよくしたい思いがある。ですから、海外進出は思っていないが海外は早い。中国は本当に速い。あの、がつがつ感は私からすれば、ついていけない。あのパワーでやっていくのだと思うが、その中で、講演した中国が世界の経済を担っていくだろうかということに、経済大国になるか二つに分かれている。一つは世界の中心になる考えとして、一つはアメリカの５倍の人口位ある。富裕層が多く、格差が激しい。しかし、私からすると心配がある。モンテの園に行った時にその園は月謝が 30 万、年間 300 万くらいし、しっかりモンテをしている。ローマにも派遣し職員研修をしているし、教具もそろっており、素晴らしい保育です。その実践のビデオをうちの職員に見せた。給食の場面を映したが、テーブルクロスを畳んでいるものを広げて、隅の刺繍があって机の角に合わせる。それを整然としているのを見たときに、ロボットがやっているといった。モンテでは仕草、お作法をすることで運動機能をつけようと開発した。私の園の職員の一人が子どもをモンテの園に通わせていてきちんとしている。その園では、テーブルクロスがめくれていたのを他の子が直そうとしたら、手伝わないでと言われたそう。それは全部きちんとやることで手の運動機能をちゃんとする意図があるから、手伝ってしまうとそれが欠けてしまう。私の園を見ると、うちの園では刺繍がないのでテーブルクロスが偏ってしまったり、子ども同士ああだこうだ言いながら直している。今後そっちの力な気がしている。みんなでああだこうだ、これじゃ落ちちゃうというやり取りが大事と思った時に現在、中国で進めている保育は人口がアメリカの５倍あるということは、アメリカの５倍失業者出るのではないかと思う。早くから子どもには、どんな力が必要かを考えた方がいいかの講演だった。聴いている人の中でモンテの人が多く聞きに来る人がいて、モンテがいいか悪いかではなく、時代的に変わってきている。時代的に変わって考えないといけないのがシンガポールで講演した主催者の考え方が素晴らしかった。シンガポールは世界一学力が高いと言われ教育に熱心。韓国、中国、シンガポールでも講演をしたが、大学受験が激しい国で、幼児の頃から受験の勉強をしている国がなぜ見守る保育を取り入れたかと言うと、園児が来年大学を受けるなら今のままでいいでしょう。現実は 10 年、15 年後に大学入試を受ける。そうすると 10 年、15 年後の問題は今のままでは通らない。見守る保育をすることで、その対策をすると言っており、私が提案していること。中国で議論したことですが、一つはエリートの子たちがいる。私が行った園のところは 140 園くらい運営しているところでエリートの園。エリートのところは別のところもあり、私は実際に大学を受ける頃にエリートの子と、見守る保育をしたかでは、受験では見守る保育の方が通るという話をした。私たちがしている仕事は今の子たちが小学校で成績がいいとかではなく、世の中に出たときにどういう力が求められるか大きく２つ問題がある。

―社会に出たときに求められる力―

１つは、子どもの環境が変わってきていること。そして、その環境に対して必要な力が欠けてきている部分がある。最近の研究の結果がある。赤ちゃんの研究。乳児の研究が進みその結果、毎日、多くの論文が出されている。新しい

知見に沿わないといけない。これからＡＩの時代になる時に、今ある仕事のほとんどがなくなる。なくなるということは、子どもたちは今ない仕事に就くことになる。新しい仕事を生み出されてくるのではないか、そこで発揮できる子にしないといけない。２つの大きな観点は指針の改定の理由にもなっている。指針も２つの理由が改訂のポイントで、時代遅れのところもあるが、そこを目指している。その一つ目。赤ちゃんの研究についてだが新しいポイント。赤ちゃん・胎児から含めた研究が進んできている。かつては、赤ちゃんは対象としては難しく、本人が言わないと難しいと進んでいなかったが、最近は視線から見ることから研究され、胎内にいる赤ちゃんからも分かり、研究されるようになり、ＭＲＩによっても分かってきている。多くが例えば、赤ちゃんは心理学で影響しているのがピアジェだが、割と正しいことを言っているが、違っていることとして言われることとして、いつごろからできるかと言うことに関しては、もっと前からできると言われている。最新の知見が出てきているが、大学の先生は忙しいので新しい知見を学ぶことが少ない。子どもの姿からではなく、過去の論文から考えることが多く違っていることが多い。まず一つが提案する大きいポイントは、愛着の考え方。最近の研究で分かってきているのは多く絞められているのはボルビーの二社関係愛着で、母子との愛着形成を持つことがいろいろな政策に影響し、保育園だと担当性と言われ、里親性、虐待されても親がいいという考え方は、ボルビーの愛着性を元にしているが、最近の研究では二つあると言われ、赤ちゃんが生存するために愛着形成を持つためには、どんな形が愛着かではなく、赤ちゃんは置かれている環境に順応する。もし担当性であれば他の人では不安な気持ちを表すと言われ、担当性の人が、「他の人では不安になるでしょ？」と言うのは、赤ちゃんはそういう環境が与えられればそうなると言われている。一方で複数の愛着を持つと、いろいろな人と愛着を持って色々な人に助けを求めるようになる。

―ドイツでのオープン保育―

ドイツではオープン保育が広まっているが、子どもはどこの部屋でどの先生の元でも自由であるという考え方で、乳児園でもオープン保育をしていて私たちが考えている愛着と全く違く、どの先生も選べ、優先順位があり気が合う先生の所へ行き、それは赤ちゃんが決めることで大人が決めることではないと考えている。複数と愛着を持つと言われ、特定の人という考えはなく、だからと言って不安はなくどこで愛着を持てばいいかは赤ちゃんが決めると言われている。赤ちゃんがどういう生き方をするかを学んでいると言われ、将来社会の中で生きていくのがホモサピエンス。特定の人と愛着を持ってしまうと、社会に出る時に困難になってしまう。小学校へ行っても、学童へ行っても特定の人に愛着を持とうとするし、小学校の壁と言って、親たちは働くことが困難になってしまう状況がある。そういう意味から個人の愛着ではなく、社会的ネットワークの中で子育てをするべきである。親が一番の考え方を脱しないと虐待が起きてしまう、何度も保護され、問題になっても親の元へ帰してしまう。日本くらいで他の国ではない。赤ちゃんは他の人とでも順応する力を持っているということを、ハーレーという人が言っている。日本では戻して悲惨な事件が起きてしまう。もともと、社会の中で子育てすべきと言う考え方で、私もなんでそういう考え方かと言うと、北京の講演でＡＩが人に代わり、どんな時代になるか見当がつかなくなる。それを考える上で、先を読むことではなく人類の進化から考えることが大事で。最近は進化と発達心理学を合わせた、進化発達心理学や人類学から考えようということが世界で起きている。そもそも人とは何かを考える。皆さんには、こういうことを考えて欲しい。

―人類の進化―

土曜日に赤ちゃん学会での発表で、私たちホモサピエンスは人族の一種類です。私たちはサルから進化したわけでもなく、同じ先祖を持ったホモサピエンスの一種類で、ある時期、地球上にアジアに原人たちが住んで、ヨーロッパにも別の種が住んでいた。世界中で頭がよくて運動神経がよかったのはネアンデルタール人だった。私たちホモサピエンス以外の人族は全て地球上から全滅した。今、ＮＨＫ『人類誕生』が放映されている。第１回目で、ホモサピエンスも死の危機になり、海に出て貝を食べてみようと思ったのがホモサピエンスだけ。人族の中で好奇心が強かったと言われ、生き延びる知恵を生んだと言われ子どもたちが受け継いでいる。これを大事に伸ばすことが大事で、新しい指針では「非認知能力」と言われている。好奇心、興味関心、探究心は「学びに向かう力」がホモサピエンスには強くある、子孫を残すためには、その時代世界でもそうだが、一夫一妻か一夫多妻の二つがあるが、多く子どもを作るのは一夫多妻の方が有効だと思うが、ホモサピエンスは一夫一妻の方が生き延びている。それは育児は、夫と妻共同でするものと言われている。一夫多妻は、妻一人で生き延びる可能性がきつかったと言われている。第２週目の人類の誕生では、ネアンデルタール人とホモサピエン人がある時で会うがほとんど戦っていない。なぜ、ネアンデルタール人が滅んだかと言うと、頭がよく運動神経もよかったのであまり集団を作らなかった。ホモサピエンは集団が大きく知恵を集めたと言っていた。石器を両方使うが、ネアンデルタール人は力があるからずっと形が変わらず、力づくでやって集団が小さかったので智慧を出さなかったと言われている。ホモサピエンスは集団が大きくなることで、知恵を出し合い工夫して脳が大きくなったと言われ、集団で生きることが大事と言われている。集団で生きるには個人の中では自分の気持ちを我慢をしないといけないが、その中でのメリットは知恵を出し合い、助け合うことが結果的に生き延びる力になったと言われている。第３週目は今月放映されるが、私たちは集団を形成する生き物で、集団の中で子どもを育てて来た。

―共同保育―

最近、０歳児の保護者が保育をキャンセルする人たちが増えて来た。育児休暇が２歳まで取れるようになり、政府は３歳まで取らせようとしているが、赤ちゃんを育てるのはお母さんが一番と取らせようとしているが大きな問題があると思っている。日本は少子高齢化で問題だが、これを３歳まで育休をしていたら３歳まで次の子を産まない。育休を取ることでもっと少子化を促してしまうのではないか、もっと大事なことは人類は短い出産期の中で多く産まないといけない。そのためには毎年産むしかない。おじいさんおばあさんは、6，７人兄弟がいたがそれで維持できたが、そのためには次の年に子を産まないといけない。９か月くらいで膝からおろして離乳して下に降ろすことで次の子を身ごもる。
降ろされた赤ちゃんは１人では生きて行けず、人類は９か月くらいになると共同保育をしてきたと言われ、他の霊長類と違うところでチンパンジーは４歳、ゴリラは７歳までお母さん一人で育てて来た。９か月するとトマセロさんは他社認識をしたり、他社の意図が分かるようになると言われている。社会で生きていくためのソーシャルブレインを育て、人類は社会を作って生きて来た生き物のだから、それを赤ちゃんの頃に学ぶ。子ども同士の学びで脳を拡大していく。
最近分かりはじめていることで、私たちは脳が大きいが、二足歩行するために骨盤がお椀型になり小さくなってしまう。生まれる前胎内で 1/4 育て出産し、生まれた後に脳を拡大している。犬や猫は 100%育てから生んでいる。生まれてから拡大するのは、乳児保育が環境によって脳の機能を影響させている。この時期にお母さんとだけといると、脳の拡大がされなくなってしまう。お母さんがいいというのは、家にいるから守ってくれるという確信が必要なのであって、人類の進化から見ると、９か月から共同保育をされてきている。京大の学長の山極さんなどは霊長類の出身なので、共同保育を

してきた形を作るべきだと提案してきている。2、3 歳まで家で育てていたら、チンパンジーと同じになってしまう、サル化してしまうと言っている。社会的な生き物にならないといけない。

―脳の機能の発達―

今回の指針で乳児保育と 1 歳～3 歳未満のことが書かれている要因になっている。脳の拡大のグラフ、赤ちゃんは生まれたのと同時にどんな風に脳が拡大するかが指針の改定の時に出されたグラフ。これはよく出しているので、お分かりだと思う。まず注目してほしいのが、エモーショナルコントロール。中国でも話したことだが、家で子どもが我慢することをさせない、ストレスを掛けまいとする。そうするとエモーショナルコントロールが拡大しない。これは子ども同士でないと脳が拡大しない。セリグマンと言う鬱の研究の人が、マウスの身体に 50%の確率で死ぬ肉腫を植え付けた。1 つ目のゲージには、電気ショックを与え苦痛を与える。2 つ目のゲージには、電気ショックを与えるがあるスイッチを押すと止められる。3 つ目のゲージは平和に暮らした。飼育を開始ししばらくすると半分死んだ。これは当然で 50%の肉腫なので当然。1 つ目のゲージでは 7 割死にストレスが増した。2 つ目のゲージは、2 割しか死ななかった。3 割は止められる力を使ってがんを治した。末期のがん以外は自分の気持ちで治すことが可能である。これには負けないと思うことで、影響する。自分で解決できるかどうかがポイントと言っていた。今の親はストレスを掛けまいとする。そうではなく自分で困難を乗り越えられることが大事と言われている。この時期大事でこのストレスは何かというと、子ども同士の関係のストレスで親が起こって躾てもこの力はつかない。親が我慢させてもただのストレスで、他の子ども同士の関係で力がつく。これが今アメリカなどの犯罪でも脳が委縮しているから事件を起こすと言われている。気をそらすのは重要な方法と言われている。集団の中で自分の感情をコントロールすることを覚えている。相手の思っていることを実現させようとすることが自立を促している。自立は自分で何でもできることです。2 歳児では排泄の自立、清潔の自立、食事の自立がある。ただ何のために出来るようになるか。人は支え合って生きるために自立が必要と書かれている。社会を支えていくために必要と書かれている。これが乳児保育の重要なことだと思う。指針では重要と言いながらもまだ甘い。0 歳から子ども同士の関係が大事だと思っている。異年齢の共同保育の 1 つ。これが母子の中で育っていたら、育たたない。中国の人が見学に来た時に 1 歳児がタオルを仕舞うと言ったらウソだと言われた。1 歳では歩かないと言われた。1 歳児は歩くことさえしないと言っていたが、共同保育が大事なのは、これから 3 歳まで育休を取って母子だけで部屋にいると社会に出たときは危ない。ボルビーの考え方があるが、もっと社会的ネットワークの中で育てようというのがある。英語の本では、dyad（ダイアド）2 社関係からソーシャルネットワークへと言うことを提案している。十分、赤ちゃんからこういうことができるし、やってあげてしまうと赤ちゃんがこんなことをしてしまうと思えない。先回ってしてしまったら出来ないと思い込んでしまうが、自分からしようとする。解決しようとする力。そのためには人をやってあげる気持ちも分かってあげる。これが 01 歳のときから行われる。脳機能の拡大が色々な分野で現れているが赤いグラフの線は言葉・言語。これらはお母さんとの中でもまだつくが、子ども同士でもつかないのはピュアソーシャルスキル（社交性・協同性）。これは 2 歳くらいから。子ども同士が徒党を組み楽しさを知る年齢。これが将来の社会の基礎となる。これには、まだまだ指針の中には保育者を介してと書かれている。1 歳はまだまだ並行遊びと言われ、別個に遊ぶと言われているが、関わり遊びの前の準備の遊びだと思っている。人を意識して遊び始めている。丸いテーブルで別個で遊んでいる。しかし、ふと前で遊んでいる子を見ると、同じように入れて遊んでいると自分の方が近いからと入れてあげようする。

そうすると他の子も来て、遊びはじめる芽生えだと思っている。並行遊びは関わるための遊びだと思っている。決して保育者を介してはいなく、子ども同士で遊んでいる。

―環境を通した保育―

指針には、保育者を通してと書かれるがテーブルで相手の遊びが見えるようにするだけでも違う。指針の改定の前に考えないといけないのが環境。これが実は最近はだんだんどの園でもやるようになったが、平成２年に幼稚園教育要領の改訂に伴って打ち出されたのが、指針で幼児教育は環境を通して行うと打ち出された。これが今回の改定でも繋がっている。先生が子どもに何かする、教えるのではなく、子どもが発達するような環境を用意する。そのために子どもと共に教育環境を用意すると書かれている。例えば、私たちはハイハイを教えようと思ったら、こうするんだよと教えるものではない。ハイハイをするような環境がないといけない。ハイハイをするためには動機がないとできない。なぜ行きたいか、自分の興味のある玩具があるとか、抱っこされたい先生がいるとか、それを先生が環境を用意する。まず広さが大事。空間的環境。日本は狭いのですぐつかまり立ちをしてしまう。ハイハイをちゃんとしないと問題がある、ハイハイすることで肺や心臓など内臓を強くし立ったときに胸板が強くなり、かけっこをしても胃や肺が強くなるのが一つの理由。四つん這いでなることで、腰や首が強くなり、そうでないと姿勢が悪くなる。３つ目は転んで脳を打ってしまうから転んだ時にとっさに手をつくように練習をしていると言われ、大体１年くらい必要で、そうすると歩き始める。広さが必要なので最低基準としてハイハイする場所を広くとるように国では３，３㎡と言われ、東京では５㎡と言われている。ある県の園でハイハイが出来るよう５㎡にしましたと言われ、園を見に行くと０歳児室は広くとられていたが、現場で観ましたか？先生が抱っこして歩く距離に使っているといった。先生が遠くにいて呼ばないといけないのに、先生が歩くための距離でしょうかと言った子とがある。そうではない、少子化になると大人が子どものそばにいる。親も子どもの近くにいる先生をいい先生と言ってしまう。近くにするとハイハイしない。もう１つが最近の赤ちゃんはハイハイをしなくなった。仰向けで寝て何で寝返りをするかと言うと、首を上げて、ずり這いをしてハイハイをするが、今はうつ伏せは突然死をするから、してはならないと指導される。うつ伏せになると、仰向けにしなさいと指導されるが、アメリカの小児の研究所の項目ではうつ伏せにさせることが質がいいと言われている。科学的な研究がないし内臓に大事なものがあるわけで、人にさらして寝ることは本来生き物はしないはず。赤ちゃんをおんぶしていたのは、きっちりつけていたし突然死はしていない。ですが日本ではうつぶせ寝をしてはいけないと言われるが、赤ちゃんはハイハイをしなくなってきている、転んだ時に手をとっさにつくことができない。それも本当のことが分からないが、ハイハイは重要であることは確か。赤ちゃんの大事なのはそういうことが出来る環境を用意することで、大きな年齢になっても同じことで指針の中に書かれているが、これまでの指針には発達の項目には子どもは自ら環境に働きかけて、相互作用によって発達する。

―コーナー・ゾーン―

自ら働きかける環境を用意することが先生の役割で、かつてはコーナーと言っていたが、子どもが絵を描きたいと思った時に、自分で分かって行ってそれをやれるようにしておく。１日中ということではなく時間の用意。環境の中には時間も用意する。これを今日は遠足の絵を描きましょうと 10 人の子に画用紙を渡して、お道具箱から絵を描きましょうといっても発達はしていかない。子ども自ら、書きたいと思っていつでも描ける用意をしておく。これがコーナーと思っていたが、最近はゾーンと言う言い方をしているが、自分のやりたいと思えることをどこでもやってもいいという考え方。絵本

は絵本コーナーで、制作は制作コーナーでと思っていたが、恐竜の図鑑を見ながら制作をするとか、そこだけにいなさいではなく、持ち出しは自由。ただし元に戻さないと次の人が困るのでコーナーからゾーンという意方に変えた。自ら働きかけてやりたいことをやれる。これは環境を通してと言うこと。

―保育士の仕事―

その中で赤ちゃんがどうかと言うと、園に行くと色々なゾーンを作っている園もあるが私からするとそれはいらないと思っている。2つ理由があって、赤ちゃんがこんなことをしたいと思った時に這っていくわけではなく、目についたものをやりたがるので、目につくように置くことの方が大事だと思っている。寝返りする赤ちゃんには散らばせておくことで取りたいと思うので、寝返りをしたり這っていくように、目的が先ではなく、目についたものをやりたがる。遊んでいたら当然次に目についたものに行きたがるので、片づけていきなさいは酷で、先生がすべきで、子どもがやりたいところへ行くのは当然。ただ、次にやらないでボーとしていることに一緒に片づけるのはいいこと。それから1歳児が大事なのは見立て遊び。色々なものに見立てて遊ぶのでここだけで遊びなさいではなく、チェアリングもおかずに見立てることも、積み木を電車に見立てることもある。ブロックはブロックのところで遊びなさいではなく、色々なところで見立てていいと思っている。1歳児になると探索活動をしたがるので、やれる環境を用意する。3・4・5歳になると、やりたいことがどこに行けばいいか分かるゾーンを作るが、0歳の時は目についたものに行くようにハイハイをするとか、寝返りをするように散らばす。1歳では見立て遊びをするので、いろいろなものを持ってって見立て、探索活動をするためにいろいろな場所に行けるように保障するとかのようにして、年齢の発達を促す環境を用意するのは私たちの仕事で、何かをさせようではない。環境を用意して子どもたちがやりたいと思ったことを膨らませたり、2歳になったら子ども同士を繋げ、深めたりする。子どもたちのやりたい気持ちをやることが、心情・意欲・態度が保育の原理原則。

―保育所保育指針改定のポイント―

元に戻り、これを前提に指針の改定の1つが乳児の大切さ未満児の大切さ。もう1つが指針に書かれている年齢は満年齢で書かれている。　当たり前に見えるが気を付けないといけない。乳児保育の所では0歳児です。0歳児は満0歳児ですので、誕生日が来たら1歳以上3歳未満のところを見ないといけない。ほとんどの園は育休明けでくれば1歳児過ぎです。そうすると　0歳児の保育の所を参考にするのではなく、1歳以上3歳未満を見るので5領域に分かれています。これは当たり前のようだが気を付けないといけないのは、育休で1歳まで必ず取るようになったら0歳児クラスはいらなくなるでしょうという人がいるが、大きな間違いです。例えば7月に1歳になる子がいます。育休を取って1歳になった。園に8月に入れようとします。8月で入れるとしたら入るクラスは0歳児クラスに入るんです。1歳になって園に入っても、今の　日本の制度では4月当初のクラスなんです。7月の誕生日に来る子は0歳児クラスに入るんです。1歳まで育休を取っても0歳児クラスは必要です。2歳まで全員が取ったら0歳児クラスは不要ですが、0歳児保育はまだまだ必要なんです。日本でいう0歳児クラスは1歳になった子がいっぱいいますので、1歳になると他者認識をし、他者の意図を認識し、集団認識をする年齢になります。0歳児クラスから子ども集団が必要です。0歳児クラスで、先生と子どもがいつもべったりして二者関係で保育をすることではない。それから、人類は8，9か月になると離乳をしているわけで、0歳の赤ちゃんのほとんどを抱っこする必要はなく、まだ授乳をしている赤ちゃんの話しです。ただ問題は、もし赤ちゃんが不安になった時、抱っこを求めてきたらしてあげることが必要です。しかし、不安になる状況を

作ることは保育では気を付けないといけないので、安定していたり一人遊びをしたり、他の子と関わって遊ぶのであれば、あえて先生は介入せず、いつでも受け入れられるようにしていく。赤ちゃんは自分で出来るようになることを喜び、やってもらっていると依存してしまう。やってもらったら楽と言うのは大人の考えで、赤ちゃんは自分でやれることを喜び、出来なくてもやりたがる。そうすることで出来ないことは頼みに来ます。例えば、袋にタオルを入れる時、子どもができないときに先生の二通りの行動があります。子どもがやれるような方法を教えてあげる先生と、さっさとやってあげる先生がいます。どっちがいい先生か。私は前者の方がいい先生だと思います。韓国へ行ったら服の畳み方が前に写真が貼ってあって、子どもに先生がついて、こうやって畳んでいくんだよと教えています。手順を教えるのがいい先生だと思っていました。そうすると手順を教えて自分で出来るようになります。しかし、自立のもう一つの目的があるとしたら、どっちがいいか私は疑問に持ち始めました。二通りの先生がいて、うちの園では頼んだらすぐやってしまうが、子ども同士でやっている時はあえて介入しない。言われたらすぐにやるためには、頼まれやすいようにいないといけない。これが先生と言う環境の在り方。1歳児が袋にタオルを入れようとしますが、全然仕舞おうとせず先生の所へ広げてと言ってくる。その時先生はすぐに広げてしまいます。やってと来たらすぐ広げてあげます。1歳に頼まれたら教えずやってしまう。すぐやってあげるにしても手順を教えるようにしても次第にできるようになります。すぐに頼むけれど、自分で出来るようになると子どもは頼んできません。例えば6か月後、まだまだやってもらう子もいるが、自分でやりたいと先生は分かっているのでわざと先生はふらつくが、頼まないのは自分で出来るようになったから。自分で入れれるようになったら、いくら頼もうとしても自分で入れるようになったり、友達に頼むようになる。仲がいいわけでもないのに子ども同士でやってあげるのは、すぐに先生がやってあげた方がこういった姿が見られる。手順を教えると自分でやるのは早いが、人にやってあげるようにならない。先生がやってあげると、こうやってあげるんだと分かる。他の子でも先生の所へ行かず、さっきやってもらった子が見かねて、他の子にやってあげている。この頃になると、不思議でなんで先生の所へ行かないのか。そういう時にもう一つ、奥の方で何かしている子がいて先生が見ていたら、先生も聞きに行きたくなるが、子どもから頼んでいないので先生もそこへ行かない。頼まないとやらない。これを応答性という。頼まなかったら言わない、ただ危険がないかだけを見ている。そうすると先生の所へ来て、やってと来たから先生はやってあげる。先生に頼むことをわかってきている。　自分でやれるようになること、人にやってあげること、先生に頼むことが基本的に自立。そのためには頼まれたらやる。頼まれなかったらやらないということ。

―最新の赤ちゃん研究―

最近言われている集団的敏感性、情緒的利用可能性と言うことが海外で提案されている集団保育の在り方です、情緒的利用可能性は愛着関係の遠藤先生が訳した言葉だが、大人はいつでも利用可能な存在で構えています。子どもが頼んだらやってあげるスタンスが大事であると提案している。愛着は一緒に遊ぶことではなく、赤ちゃんが必要な時にやってあげる用意を示すこと。私の園では、食事の時に遊んでいるのを切り上げます。手を洗った子がタオルで手を拭いて、エプロンを探して席に座ります。この手順を知っているので自分でしようとするが、手が洗えないなどの困難があった時に、先生が流しの所、エプロン、いすの所、集まったところに先生が散らばっています。それぞれの場所で子どもが頼みやすいように、先生は先回りしてやってあげないこと。困っていても自分から頼まないとやらない。それを察してやってあげることをしない。子どもはちゃんと頼む。やれるときは自分でやる。これが最近提案される愛着の考え方。負の状況に陥った時に駆け込める場所としてこれを複数持つことが大事です。私の園で男性保育士がダメな子がいた。0歳児に男性の保育

士がいたがその先生が抱いたら泣く。問題なのは６月に父親保育と言うお父さんだけ保育する日があって、絶対泣くだろうと思っていた。自分のお父さんにはいいので、かつらやひげを用意したが駄目で泣いてしまった。その泣いて仕方ない赤ちゃんが、這ってしがみついたのが普段泣いている男性保育者だった。一度も抱いたことがなかったのでオレでいいのと思ったようだが、赤ちゃんは泣き止んだ。お父さんに渡そうとしたら泣いて、必死に先生の所へ来る。生まれて初めて抱くことができて先生は感動していた。普段は優先順位が低かったが父親保育では一番高かった。先ほどの赤ちゃんの研究で愛着は複数持っていて、赤ちゃんは優先順位を決めている。そうでないと生きるためには一人だけと決めてしまうと危険。一人だけだったらトイレにも行けない。不安になってしまうことがある。と言うことで最近の乳児の研究から大事さ、今回の指針の大事さがある。

―教育改革―

もう一つ大きな改定の重要なのは大学入試が改革される。人工知能が進むにしたがって、センター試験がなくなります。中国でも話をしていて、大学入試の改革が進んでいます。知識を問う問題を止めようとしているといったら馬鹿にされ、「未だにしていたんですか？」と言われ、中国では暗記して覚える試験はしていないと言われた。マークシートは採点のこともあって知識を問いていたが、2020 年に廃止される。新しい学力観が提案され高校、中学、小学、幼児教育を変えたのが今回の指針の改定の１つです。大学まで一貫した教育をしていきましょう、幼稚園・保育園も教育の内容が全く一緒。幼稚園は教育で、保育園は福祉とか、そういう考え方が全くなくなって教育はどこへ行っても全く同じ。小学校へも連携で小学校と仲良くなりましょう、連携を取りましょうだったが、今回の指針ではそうではなく、子どもたちの育ちを小学校へ円滑に接続していきましょうという風に変わった。そのポイントとして 10 の姿を書くようになった。これを小学校の先生と共有して繋いでいきましょうとなった。これが新しい指針の２つ目のポイントです。本当は０歳から上にあげていくべきなんだが、今回は大学から順に幼児教育に降りてきて無理なところもあるが、円滑に移行していきましょう。その中で小学校の１年生も幼児教育の手法を取り入れ実際の体験やアクティブラーニングというように自ら体験し、経験から学ばせることを低学年にしましょうとなった。座って知識を覚えるのではなく、体験するような教育に変えていきましょう。自分で何をしたいのか、どう思っている子にしていきましょうと小学校も変わって来た。そして円滑の移行のために幼児期に何をすべきか。10 の姿だけでなく、色々な事が書かれています。実は幼稚園の方に書かれているのではなく、小学校の学習指導要録に書かれているので読んでみるといいと思います。幼児期にこんなことを体験してきている、小学校では図形を習います。幼児の頃散歩へ行ったら、葉っぱの形、虫の形、様々な形に注目し体験してきている。それがどんな形かを学ぶのが小学校。形の違いの特徴を身をもって体験してきている。それを踏まえて、その名前を教えていきましょう。この間ある園で話していた時に調理がそれを踏まえて、おにぎりの形を三角や丸にしたりしていると言っていた。それはいいことだと思います。もっといいのは「丸いと転がって困るね！」と先生が言うと、よりいいです。調理だってそういうことに関われる。四角いおにぎりをうちでは軍艦巻きと言って、お寿司みたいに海苔をつけることがあるが、もし皆さん時間があったら調理の先生にお土産で河童橋に売っているので、一遍に 10 個くらい軍艦ができるので、四角いおにぎりしてみたりと、こういうことを幼児期に体験させることが大切で、改訂のポイントになっています。乳児・未満児の大切さ、小学校への円滑な接続が今回の大きな改定のポイントです。これは私たちが前から提案している保育に共通していることで、私たちからするとそう新しいことではなく、私たちがやっていることがスタンダード化してきたなという想いをしています。色々な実践を交換し、おやつの出し方・やり方ではないがこんなことをしています

とか、時間の認識をするためにこんなことをしています、と情報交換していくといいと思います。この後懇親会があるが情報交換もあり、最初は地域ごとを知ってお互いに学び合ってより良い保育をしていけたらと思います。指針の改定を踏まえてお話をしました。今日はお疲れ様でした。

本稿は、2018 年 7 月 9 日に行われた第 47 回保育環境セミナー2018 の講演内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）

2017年度ＧＴセミナー
第４７回保育環境セミナー後編
2018.7.9～7.11

第７３号　２０１８年7月２３日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

セミナー2日目

前号に引き続き、第47回保育環境セミナーについてお送りします。

本号では、セミナーに参加した先生方から寄せられた
「見守る保育」についての質問に対しての考え方を
ギビングツリー代表の藤森先生に示して頂きました。

また、昨年度保育環境セミナーを開催した際のレポートは
以下の通りになっています。

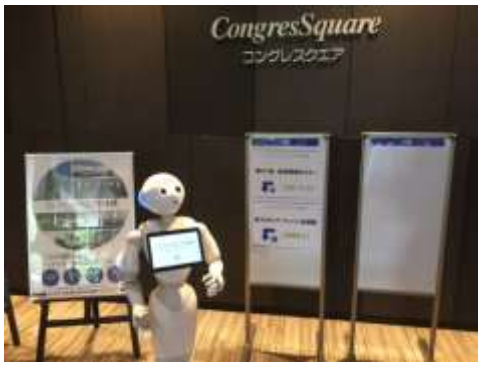
●2017年度セミナーレポート報告

第44回保育環境セミナー：本誌、第20～21号

第45回保育環境セミナー：本誌、第29～30号

第46回保育環境セミナー：本誌、第34～35号

※昨年度の開催した保育環境セミナーの藤森先生の講演録や
Q&Aの議事録は上記のレポートからお読み頂けます。



会場ではペッパー君がお出迎え！

●今後のセミナースケジュール

GTサミット	2018年8月20日～21日
第48回保育環境セミナー	2018年9月3日～5日
第49回保育環境セミナー	2018年10月15日～17日
第14回リーダー研修	2018年11月26日～28日
職域別見守る保育セミナー	2019年1月21日～22日

「文字」と「科学」の冊子
1 冊 500 円で販売中。購入希望の方は
新宿せいが子ども園　山下先生まで。

具体的な事例が掲載

●過去のバックナンバー

第７０号
昔の田んぼーカグヤ田
第７１号
古民家『聴福庵』2018②
第７２号
第 47 回保育環境セミナー前編
http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/

セミナーを終えて思うこと

今年度第 1 回目となるセミナーを無事終えることができました。

竹橋から日本橋へ今年から会場を移しました。現在試験的にですが、講演内容をライブ配信できないかもテストも行っていました。

保育環境セミナーも今回で 47 回を数え、先生方の保育実践も厚みを増す中で事務局としても、先生方がよりよく参加できるよう試行錯誤を続けています。

そして、いつも会場の後ろで新宿せいが子ども園の先生方が、セミナーに参加された方限定で保育実践の冊子を販売しています。

冊子の内容は、昨年 1 年間新宿せいが子ども園を会場として全国の GT 園の先生方が集まって月に一度行われていた「文字・数・科学」の講座の内容をまとめた、保育実践事例が数多く掲載されています。

よく先生方が、「行事のための準備はせず、日々の保育を行事でも見せています。」と言われていますが、それと同じように昨年 1 年間通して、学んできたことを冊子にされ、日々行っていることがそのまま活かす姿勢を会場でも見せて頂きました。

私も昨年、講座に何度も通わせて頂きました。その中で、指針が新しくなりどう教育的な要素を取り入れていけば良いのか、どう保育を実践していけば良いのだろうか？と先生方から聞かれることがありました。

先生方の学びや実践がまた他の園で役に立ったり、子どもたちが楽しく過ごすことに役立つと思うと、今回のセミナーでも新たな保育事例がまた取り溜まったのだと感じます。

（報告者：株式会社カグヤ　奥山卓矢）

caguya
〒161-0023
東京都新宿区西新宿 3-2-11　新宿三井ビルディング 2 号館 10 階
Tel:03-5909-7155
毎週月曜日に配信しています。
ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ　奥山卓矢

メールマガジンのご登録は、
ＱＲコードからお願いします。

第４７回保育環境セミナー『Ｑ＆Ａ』

今回、セミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、【保育環境】【年齢別と異年齢保育】【保育士の対応】【食育（食事）】【行事】の５項目に分類し、ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。

―はじめに―

まず、私の園でよく質問を受けることがある。私たちは一人ひとりを大切にすることを言うが、集団やみんなのことは必要ないのか。せっかくみんながいるのに必要ないのかと言われることがあるが、私は集団は大事だと思っている。何で集団が大事かと言うと。皆役割が違う人で社会が成り立っているから。皆で支え生きていく社会のために集団が必要。みんな一斉で必要なのではなく、自分の役割をすることが必要なので、一人ひとりの違いを認めることが集団のために必要。集団が先にあるのではなく、みんなで集まって集団になる。声を掛けてはいけないとか、どこまで見守っていいのかとか、給食の時間になったけど真剣に遊んでいるから見守っていいのかと言われるが、声を掛けることも怒ることも必要だと思っている。ただ何のためにするのか。例によく出すが、電車の中で本を真剣に読んでいて、いつも新宿で降りるのに気づいていない。真剣に読んでいるから、放っておいていいのかと言うと、そうではなく、もしもしと声を掛けることは悪くない。ただ降りるかどうかは本人の判断。最初の頃、助手を連れて歩いていたが、飛行機に乗る前にラウンジでブログを書いていてふと時計を見ると直前で、一緒にいる助手に「何で言わないの？」って言ったら、「真剣にやっていたから見守っていた」と言われたが、声かけてよと言った。「給食の時間だよ、もう並んでいるよ、配膳がはじまっているよ」と言ってあげていい。自分で時間を見れることも大事だが、気づいていなかったら言ってあげてもいい。大事なのはその後をどうするかを決めるような問いかけをする。「皆、給食言っているけどどうする？」と聞いた時に「じゃあ行くよ！」と決めるようなことをする。声を掛けてはけないのではなく、自分で決めるようにする。ドイツの給食もそうだが、野菜は身体に大事でいうことも必要で、それを言ってどうするかは子どもが決める。昨日も質問を受けたときに私の孫が小学校１年生になったが、好き嫌いも多くお菓子しか食べない。野菜を食べない子に対して私の妻が「困ったもんだ」と言っていた。ある時、孫は私の妻に、「ばあば」は好き嫌いがないんだねと言った。その後に「いいな、自分も好き嫌いがなくしない」と言っていた。好き好んで好き嫌いしているわけではない。その後にそんな自分が嫌いと言ったそう。妻は何と言ったらいいかと聞いてきた。いつも注意されても食べられない。子どもが好き嫌いあることに対して、どうしたらいいかと言ったらこの映像を見せようとした。中国の町に散策へ行ったら露店に食べものが売っていた。さそりが串に刺さっていた。これをすぐ食べれますか？ムカデや蛇、蝉とか普通に売っていた。それを食べなさいと言って食べるか。向こうの人は文化で食べる。私もゲテモノは食べないが、どこの店でも売っているので、ゲテモノではなく普通の食べ物だと思って買って食べてみた。美味しいわけでもないが食べてみた。嫌だと思う人もいる。子どもも好き嫌いがあるからと言って得もない。でも食べれない子もいる。そういう自分も嫌だと思っている。子どもながらに悩んでいるのだと思った。大人の言うことを聞かない子と言うが、子どもは悩んでいて、自分もやりたいと思っているのだと思う。どういう質問が出るか分からないが、孫を持ってみると変わってくる。真剣にしなくてもどうにかなるんじゃないと思ってしまう。ここのところブログで書き始めているのが、最近アメリカで評判になっている本で、子どもにとって親はそんなに関係ないというもので、ちゃんと人は生きてきている。親がそんなに影響を受けるなら、子どもがいっぱいいたら全部違ってきているはずだが、そこまで影響されていないんじゃないかとある。子どもが選べるのは友達、ピアソーシャルスキル。子ども同士の気が合う友達は選べる。そこからの影響が大きいのではないかと言う本。親よりも子ども同士の影響が大きいのではないかと言われている。親の影響が大きいと言われているとバッシングを受けていたが、今は賞を受けている。親がいいに越したことはないし、

だからと言って、親だけが影響するわけではない。質が高い保育の中に、親の気分で子どもを見るのがよくなくて、放任の方がまだましと言われていて、不安定着愛着の子は不幸だが、そういう子どもの親でも、いい保育者からの関係の影響が大きいと言われている。先ほどの本と同じこと。親がいいことに越したことはないが、普段の保育者や友達の影響の方が大きい。親のせいにはできない。親が園だからこの子がおかしいではなくて、それを私たちは理解して、その子を認めることで変えることができると言われている。保育者の仕事は重要であると言われていて、質の高い保育の中で２歳児の保育者との良好の関係が小学校３年生の成績に影響すると言われている。小学校３年で成績が悪かったら、2 歳の担任のせいと言われても仕方ない。この中にも 2 歳の担任かもしれないが、小学校 3 年生の成績が下がるのは２歳のころの担任と言うことも研究で出ている。全部因果結果があるわけではないが、イギリスの研究で出ている。良好な関係は脳が出来ることに関係している。私たちの仕事は先になって結果が出る。ヘッグマンの研究がそうだが、小学校で勤務していたことがある。ある子が出た園で英語を教えたり、足し算をしていると学校のテストをするとずっと満点。親は幼稚園のことを有難く思う。しかし、教えている経験上分かったが、習っていない分野に入ると分からなくなる。そこまで勉強しなくても 100 点取っているから勉強する癖がついていない。習っていないところ来ても、同じ生活をすると当然成績が悪くなる。いつ頃から下がるかは習っていたところまで持つが、下がってくると勉強しないから、先生のせいにするが早く教え過ぎた保育園、幼稚園のせい。親はあそこを出ると成績がいいから幼稚園へ入れた方がいい、早く教えてくださいと要求するがその時には思わない。ヘッグマンの研究では、強化学習をしても長期的には効果がない。かえって下がってしまう。長期的には、学習意欲や学習態度は知らない分野へ行っても続くわけで、ここは幼児教育で学ぶ最大のことで、これを十分に学ばせておくと成績が上がる。それは保育園、幼稚園のお陰だとは思ってくれない。勉強した力をつけているのは幼児教育の影響。効果が後から出る。その効果は私たちのおかげだと思ってくれない。どうしても、短期的な結果が出るところに親は子どもを入れたがってしまう。園の方も、こんなことを教えるとなってしまう。人の記憶は 3 歳以下の記憶はほとんどなくなると言われ、2 歳までが大事だが、大人になってもその頃を大人になって忘れる。そういう意味でもそんな気がするが、別に損得でやっているわけではないので仕方ない。何かあった時に思い出してくれればと思う。私の経験からすると、自分のことを理解してくれた先生がいたなと、そういう人に会いたくなることはある。表立って感謝されなくても、保育園時代にこんな先生がいたなと思えるような存在であればいいなと思う。

【保育環境】

保育室内で、遊・食・寝の独立が難しい場合はどうしたらいいでしょうか。

遊・食・寝の独立は基本的に望ましいが、そんな贅沢は出来ない。日本の文化はそんな特徴がある。アネビーさんが会場の後ろで展示しているが、ドイツのハーバー社と連携しているが、現地で社長にも会ったことがある。最近日本から注文が来るが、日本からしかない注文がある。「これは何で？」と思うものがあると言われ、どんなものが聞くと、机の脚をたためるようにしてほしいと言われ、机はたたんでいるのかと聞かれた。これはちゃぶ台文化で私も子どもの頃、一つの茶の間があって、一家団欒で食事をして、そこで布団を敷いて寝る。そうすると机が食事の時出した机が、寝る時は邪魔なので丸くして転がしてたたむ。同じ部屋を兼用していた。世界では寝室があり、兼用するのは駅弁文化もそう。座席で食べることがない。駅弁はあまり匂いがなく、冷めても美味しく、日本は贅沢できないので気を付けないといけないのは、例えば遊ぶ後に食事をするとしたら、遊んでいる子を中断させてしまう。やっている途中で中断することになってしまうので、続きが出来るようにしておく、隅の方にスペースを作るなど、中断しないような工夫が必要。遊んでいる後に食事は別の部屋。食事をしている間に布団を敷く。中断しないでいい工夫をするといい。子どもが続きをできるような工夫や活動と活動。食事の部屋と布団を敷く部屋はあまり隣にしない方がいいと言われている。うちはコットを置くだけで、まだ埃が立たないので工夫したり、埃を考

えること。もう 1 つは私の園で 1.5 倍に定員が増えて、お昼寝の場所どうしようか？と思った。色々調べてみると眠育というのがあって、子どもの睡眠を研究するところがあって、今の研究では３歳以上はお昼寝をしなくていいという結果が出ている。なので、選べるようにして年長でも眠かったら寝れるようにしている。0 歳からは寝かしつけるが自然と目覚めたら起こしている。３歳以上になると自分で選択するようにしたら、制作や絵本のところに行って寝る人数が減った。ショートスリーパーと言って、個人差が大きいということも分かって来た。同じ時間だけ寝る園はよくない。大人の都合で寝かしているとバッシングが出たことがある。本人が疲れたら寝る。休息と言って、本を読んだり、制作をしたりし図鑑活動をする。そうすると先生がついてなくてもいい。全部食事を片して、布団を敷いているわけではなく工夫をしている。

【保育環境】

ゾーンとコーナーはどう違うのでしょうか？

ゾーンとコーナーの違いは、自ら環境に働きかけてと言うことからコーナーを用意した。コーナーでやっていることは隣のコーナーまで伸ばしてはいけない。例えば、こっちでブロックをしていたら、本を読んでいる人の邪魔をしてしまうと思っていた。これは国によって作り方が違う。ドイツでは家具を壁につけて、そうすると子どもが真ん中で離すと走り回って困るので、直角に置くと四隅に場所ができる。その隅は絵本を読むところ、制作するところと言うことでコーナー（角）とした。建築でも直角に出す方が落ち着くこともある。アメリカでは、センターと言って、インタレストセンターと言って、子どもが興味関心を持つ場所を作ろうということで、絵本センター、クリエイティブセンターと言うのは、子どもの興味関心を持つ場所を作りましょうとしている。ドイツ報告でもあるがゾーン体験と言って、わくわくして乗ってしまう。お寺の中で、三昧と言う言い方があるが、ゾーン体験をしてほしい。区切られた場所ではなく、ワクワクしてほしいということでゾーンと付けた。すると、コーナーと違ってある時、制作を好きな子がいて乗り物を紙で作っていた。電車や車を作っていて、他の乗り物をつくっていきたいと乗り物図鑑を持ってきて、トイレットペーパーを持ってきて作っていた。絵本を持ち出すことがいけないのか、ままごとをやっている隣で紙で作って、これをおかずにしている時に、「それを持っていっちゃダメ！」と言うか。子どもの遊びは組み合わせて盛り上がり、子どもは学んでいるので、見立て遊びも出来ないし融合も出来ない。私は盛り上がることが中心だったら、何処へ持っていっていい。ただ、何かを描きたいと思った時に、元の場所にクレヨンは戻さないと次の人ができない。やりたいことがどこに置いてあるかの意味を分かるようにするので、コーナーとゾーンと使うようにしている。私は大学が建築だったので、ゾーニングと言って人が生活するような区域をパブリックゾーンとか、ゾーンと言う言い方をする。博物館に行くと自然科学ゾーンのようにも言われ、興味関心でゾーンと言うので私が名付けた。もう 1 つの言い方は、コーナー保育が一時期流行ったことがある。一斉に何かをさせるのではなく、子どもに好きなことをさせましょうとしたが、子どもが極端に一日中サッカーをしているとか、あまりよくないと廃れたこともあったので、ゾーンと付けた意味がある。言葉よりも内容を理解してもらえるといい。何をしたいかと言うと、子どもが自ら働きかけて、心をわくわくするような場所を用意して、区切らなくてもいいし、園庭にもゾーンがあっていい。木陰で絵本を読む絵本ゾーンなどがあってもいい。子どもが色々な事に興味関心を持つことがゾーンだとしたら、小規模施設でもワクワクするのは同じなので、用意することは必要。場所として区切ると狭いと思ってしまうかもしれないが、色々なわくわく感を与えればいい。評価スケールでは、７つあればいいという意味ではなく、たくさんのワクワクを持たせましょうということ。3,4,5 歳のごっこゾーンが流行って来ていて、子ども同士が競い合って何をしたいか話したらしい。子どもたちで話合ったら、経営者会議と言って開いているらしい。そういうことを膨らましていくことがゾーンです。

【保育環境】

小規模保育園：０歳児～２歳児で１２名で見守る保育をするとしたら、どのようなことをポイントに行ったらよいのかをお聞きしたいです。スペースがない中でのゾーン遊びの工夫を聞きたいです。

狭くても盛り上がらせていけば良い。活動が中心で狭い中でも興味関心を持つことは公園でも持たせられるし、散歩でも持たせられるので、広い中から子どもの興味関心を引き出してあげればいいと思う。3 人だと少ないなと思う。子ども同士の関わりが少ないと思うが、12 人いればいいと思うが、3～5 がいないので園と連携を取って、関わったりするといい。長崎の平戸は過疎で、5 人とか多いが 1 週間に 1 回。同じ見守る保育をやっている園で集まろうと大きな集団で過ごすことも意図して、仲間を作るといい。たまには大きな集団でやる。系列園があるなら合同でするとか、子どもが様々な体験を出来ることが大事です。

【年齢別と異年齢保育】

当園でも異年齢保育をしているのですが、周囲の子が困っている時（お茶をこぼした等）に自分から手伝おうとする姿が少ないです。保育士が手伝う姿を見せる事で変わっていくのでしょうか。良い対応があれば知りたいです。

質問の園が取り組み始めて何年かだと思うが、始めた当初はモデルがいない。子どもは真似をして、文化を伝承していくが最初はモデルがいないので、どう違う年齢と付き合えばいいか。だからこそ異年齢を始める意味がある。質問にあるように、先生がどんな対応をするかを見せること。その対応が子どもがそれをモデルにして、真似を出来るような対応にしないと先生という権力から注意されても伝承しない。「年長だったらこするんだよ」とモデルを見せることだと思う。私の園で 4 月当初は大変。そこに助かるのは卒園児が手伝いに来てくれる。特に 4 年生が来てくれ、卒園児が年長児より上手。うちの新人職員よりも見守る保育が上手。ある時 2 歳に入っていった卒園児がいて、帰りにお便り帳をしまい忘れた子がいて、これ仕舞って来てと言ったら、その卒園児がお便り帳をしまいに行った時にふっと、その子のところへ行って自分で仕舞って来てと言っていた。多分、そういう姿を見ていたのだと思う。おむつを替える時も手を首に回していたり、先生を見ている。下の子を手伝うのも、先生がしてあげるといいと思う。若い職員にも口で注意せず、年配の先生が姿を見せてあげる。どうしたらいいかの姿を見せる。口で命令してやらせるのではなく、姿を見せることも大事。子どもの中で伝承するまで、先生がやってあげればいい。ただ手伝い方がやってあげるのではなくて、本人が出来るように手伝う。お茶をこぼしたときも、私の園でも雑巾を床の上、机の上、トレーの上で服雑の巾の色を変えている。床の場合は青、机の上は黄色とすると、自分たちでしようとする。分かりやすくしてあげると、自分でやろうとするし、もしかしたら小さい子に、こういう時はこうするんだよと教えてくれたり、実践報告を見てもそういう姿が見られた。先生と子どもも異年齢ですので、先生もモデルとして入る。経験者が経験をしていない子に教えたら伝承されていくと思います。

【年齢別と異年齢保育】

異年齢児保育を行っているのですが、年少の子たちが上の子を見て、遊んでいる姿は見られるのだが、年長の子たちが下の子たちへの思いやりや手伝うなどの姿がなかなか見られません。もちろんしなければならない訳ではないとはわかっていますが、異年齢の良さとも思っているので、どうすれば下の子に対して思いやりの気持ちが生まれるのかを知りたいです。

明日もし私の園に来られるのなら 3,4,5 歳の部屋に掲示がある。子どもの文化はどう伝承していくかを子どもに聞いたもの。ブロックを積んでいた時に壊れてしまった、どうする？それを 3,4,5 歳に質問したものがある。その多くは、年長さんにブロックを壊されたらどうする？と聞いたら、誤って壊しちゃったら、今度から気をつけてと

言っていた。それは、自分がそうした時にそう言ってくれたからと言うのがほとんど。やってもらったときによかったから、嬉しかった経験が、次にやってあげることになっている。手伝ってもらって、共感してもらって嬉しかった経験を積み重ねて人にやってあげようとする。この経験がないと人にするのは難しい。まずは、先生が共感して子どもが嬉しかったら次にやってあげようとする。3 歳の子が泣いていた時にある 4 歳の子が慰めていたが感動した。慰めているのに感動したのではなく、1 年間ずっと泣いていた子が一生懸命慰めていて、お母さん戻ってくるよと言う映像を見ると、散々泣いていたのにと思うが自分が嬉しかったことを、人にやってあげようとすることが多い。研究の中でも人のためにやろうというのは 6 年生くらいからしかないと言われているが、困っている人がいると助けるのは、わざわざ思いやらなくても困っていたら手伝うと思う。人間はそういう心を持っていると言われている。ドアを開ける時にものを持っていると、19 ケ月の子でも開けてくれると言われているが、困っていないとしない。やってもらって嬉しかった経験が積み重なることがあると思うので、思いやりの気持ちをつけましょうというよりは、困っている時は手を貸してくれるだろうと思う。私の園でも子どもが冷たく見えると言われる。島根から来た職員はまず、子どもたちが冷たいと思ったと言っていた。東京の文化で積極的に手を出さないが、頼まれたらいやと言わない。逆を言えば、頼まなければしない文化もあり、手伝ってと言ってみたらと、子どもも嫌らがないと思うのでいいと思います。

【保育士の対応】

２日間の講演、紹介、報告を見させていただいて、まさに自分の理想としている素晴らしい理念での保育だと胸を打たれました。しかし、我に返れば、自園ではまだまだ達していないと痛感しました。どうすればいいのでしょう？

１つは達していないと感じることは半分達していると思う。問題なのは自覚していないこと、痛感している人は、半分は達している。子どもたちのことを考え、大人の考えでしていたと思っているだけでそれで十分だと思う。子どものためだとやってしまうことは始末に困るが、その先生からしたら子どものためだと思っている。その人がいけないのではなく、そういう目に遭ってきたこともあるので、子どもを思う気持ちは大事に思ったほうがいい。ただ、思う場合はどういう方法がいいのかを考えることだと思う。保育をした時に、長い先生がこれまでしてきたことはいけなかったのでしょうか？と聞いてくることがあるが、「これまでの保育のおかげで今がある」と言っていたが、今は時代によって要請されるものが変わる。戦争中は人をどう殺すかを教えていたが、今は時代によって違ってきている。例えば、農家の課題としてまず一つは早く作る。見てくれをよくする。キュウリを早く作ること、真っすぐ作ること、時期に関係なく作るとしたら、農薬をたくさん使うことがある。体に良くないから否定する。子育ては、早く安く見てくれよくするものではない。しっかりした人を作ることですから、一緒に考えていきましょう。ただ否定するわけではなく、考えていきましょうということ。では、どうしたらいいのかをみんなで話し合っていけば良いと思う。自分で自信をもって、これでいいということはないので、いつでも悩んで私の園でもいまだに職員同士でやり合うこともあるし、私も偉そうに言っているが、職員は私の言うことを否定することもあり、それはよりいいものを話し合う訳なのでどうってことはない。いいものをつくっていこうということなので、子どもにとってどうあるべきかを考えるだけで達していると思うのでいい園を作っていけたらと思う。

【保育士の対応】

活動の中でどこまで自由にさせてあげれば良いですか？就学に向けて、小学校の生活によせて集団生活した方が良いですか？

自由の考え方だが、好き勝手していいことではなく、自分のままにと言う意味で自由の反対は統制と言う意味がある。子ども主体であることは、自由で好きなことをしていいことが自由なわけではない。当然自由にさせてあげる

といいが、好き勝手にしていいことではない。お集りの時に人の話を聞くことは大事なことだが、問題は先生が大事なことを話しているのか。毎日決まったことを儀式のように話しても子どもは聞きっこない。それぞれの年齢によるが小学校 1 年生の教員の時の話だが、朝礼で校長が話している時に私のクラスの子がグダグダしていた。隣の先生が「仕方ないわよ、校長の話がつまらないからいけないのよ」と言ったので、「校長にだってつまらないと言いに行けばいいのに」と言ったら、藤森先生は軍国主義ですねと言われたが、グタグタすることではなく、子どもでも文句に行けるのが民主主義と言うことで、朝礼の後に今日の話はつまらなかった、面白かったと言いに行くようにした。文句を言いに行くためにはちゃんと話を聞かないといけない。子どもたちに伝えたことはグタグタするとかきちんと聞くではなくてお集りの時に何で人数把握をするかと言うと、今日は何人分用意するかをするわけで、返事をしないとその人の給食がない。何で返事をしないといけないかが分からない儀式にしても仕方ない。やたらと走り回ってしまうのは、その子はそのあとできる保障がない場合が考えられる。その続きができるよと言うこともある。色々な工夫だがドイツでは、遊んでいてお片付けしてお集りしましょうという時に、遊びを片付けてお集りをするが、そのままお集まりしようとやりっぱなしにして、じゃあ片づけに行こうとしていた。遊びの途中に切りあげるのは難しいので、片づけない子がいたときに子どもたちに相談したら、次の日はその子だけが片付ければいいとしたら、二度とそういうことはなくなった。色々な工夫があるのだと思うが、みんなでやる、何でいつまでも子どもがやりたがるのか、続きができないとか、何か原因があり、走り廻るとしたらその子にとっては走る距離が足りない可能性がある。子どもは色々な特徴を持っている。多動性発達障害はやたら動くのが好き。お集りの時じっとしていなかったら障害だが、走らせたら早い、メダルを取ったボルトも多動性発達障害。多動でなければあんなに速く走れない。ボルトに走らせたら世界一。その子には走ることを多くする。お集りの前に園庭を 10 周したらじっとしているかもしれない。その変わりみんなで集まる時は静かにしましょうとする。その子の得意なことを発揮できるようにしてあげることだと思う。無理やり集めるのではなく、集める意図がいる。私の園の近くに公立の幼稚園があるが、小学校へ行ったら困るだろうときちんとさせている。最初のうちは保育交流をしていたが、今は運動会だけ共通にしている。玉入れは小学校が一緒になるので一緒になって練習をするが、うちの園児が不思議がる。ピッと笛が鳴ったら座らさせているが、頭を押さえて言えばいいのにねと言っていた。小学校へ行くとうちの園児の方が座る。言われて座っていない。幼稚園の時に集団にやらせていたら返って小学校でも酷い。座ること集団で動くことに意味があるが、怒ってさせていたら、怒られなくなったら座らなくなる。そうじゃなかったら先生もメリハリをつける。うちの場合職員を信じあうことで分かるのは 1 番の先生がリーダーで、2 番の先生はグタグタした子を注意するようにする。３番は次の準備をするが、ある時後ろでおしゃべりしている子たちがいた。２番の先生が本来注意するはずだが、何を話しているのだろうと、気づかないふりをしてそばに行ったら、子どもたちが「トマトのにおいしない？給食に入っているのかしら？」と五感を働かす話をしていた。下が給食室なのでにおっていて、2 番の先生は、1 番の先生の話よりも子どもたちの会話の方が大事そうと思って、放っておいたらしい。1 番の先生は何で中止しないのでなく、お互い信頼し合って、注意しないのは何か意味があるのだろうと思わないといけない。子どもが何を大事にしているかを考える。子どもが一体何をしたいのだろうと考える。無理やりいかさればいいということではない。遊び以外はやりたがらないのだったら色々な事を遊びにすること。例えば、おむつを替える時にひっくり返って替えられない。新人がおむつを替える時、アンパンマンのシールを貼っていて、子どもが替える時に見えるようにしていたり、今日のラッキーガールと言って騒いでいた時に先生がどこかに椅子の後ろにシールを貼って、シールが貼ってあった人がラッキーガールと騒ぐと競って座っていた。ある子が自分がシールを貼りたいと言って貼っていた。お集りもつまらなく集まるのではなく、工夫するとか、おもちゃも 1 歳児が中々片さなかったら、ショーボックスに入るような型を入れる玩具がにして片づけるようにするとか、遊びとの区別がないので片づけることも遊びにしてしまう。遊び以外のことは誰だってしたがらない。すぐ手伝ってしまうのは、経験してこなかった子には手伝ってしまう。先回りをしてやってしまうと依存になってしまう。赤ちゃんが朝一人で遊んでいるのに抱き上げてはダメで、抱っこと言ったらしてあげる。これも研究である。スポックの博士

やフロイトの考え方があるが、赤ちゃんが寝る時は一緒に寝ちゃダメと言われ今でもヨーロッパでは今でも広がっているが、現在の研究ではすぐ抱くと、総抱き時間は短くなると言われている。一番してはいけないのは、言ってもいないのに抱っこすること。それは年長でもそう。抱っこで来るのは嫌がるが何かある。満たされていない不安があるのでその時にはしてあげる。必要な時はしてくれると思うとそういって来なくなる。小さい子でも、大きい子でもやってあげる。言ったらやる、言わなきゃやらないとするといい。子どもが何か言ってきたとき対応する時、これまでは対応することが大事と言われてきたが、言わないけど気づいてしまうからやってしまっていたが、その時代では逆に言わなかったらやらないことも大事と言われている。言わないからしないというのが大事で、今は言わなくても気づいてやってしまうことが多くなってきているが、あえて介入しない。子どもと一緒に遊んじゃいけないのかと言ったら、一緒に遊ぼうと言って来たら積極的に遊ぶ。子ども同士で遊んでいる時に先生も入れてと言わないこと。赤ちゃんでも先生を巻き込みたいと思ったらいつでも入る。

【保育士の対応】

未満時（１歳）の中で今、噛みつきが増えていて子どもをしっかり見守っているのですが、どうして噛みついてしまうのか、どういう気持ちなのか見守ることも大事なので観察しています。ですが、その間に噛みつきが発生してしまいます。噛みつきの対応があまりうまくできないので教えていただきたいです。

噛みつきはよくいろいろなところで課題になるが、何で人は噛みつくのかを思ったことがある。国立科学博物館の人類の進化の中でだんだんと歯が内向きになってくる。昔は歯は攻撃で使っていた。それを今は咀嚼にしか使っていないので、噛みつきになる。攻撃するとき赤ちゃんは何で、歯を使うのかを疑問に思った。噛む作業はいくつか考えられるが、一つが咀嚼、前歯は肉をかみ切る時に使うが、それを攻撃に使うのだろうかと言うことはないだろう。噛むことで唾液を出す。咀嚼を促すために噛む行為をするが、唾液を出すために噛むわけではない。玄米を食べさせることで噛む回数が増え、脳の活性化もあるが、噛んで脳を活性化させていないだろうと思ったが、野球選手がバッタボックスに立つときにガムを噛んで緊張を取っている。昔はマンガのシーンでタオルを女性が噛んで、キーとしていたが、急激にストレスが溜まった時に噛むのだと思う。善悪ではなく、ストレスを下げる時に噛むのだろう。先生は仲がいいのに噛んでしまったと言うが関係ない。集団の中に入る時のストレスで噛む。噛みつきの話し合いをした時に、原稿は幼稚園の先生が書くと言われ、幼稚園では 3 歳で噛むらしい。私たちからすると、3 歳で噛んだら噛み切ってしまうだろうと思うが、初めて家から集団に入るときのストレスなのだと思う。大体、忙しい時などにがぶっと噛む。どんな状況の、どんな時間帯かを気を付ける。その子のそばにいる時は間に入るとか、距離を置くとか、先生がその間に入るとか、その子同士を離すとか、噛みつきで危険なのは伝染する。やはり止めさせないといけないので、見守るのはどんな相手に噛むかを見ることを大事。その状況を守ること、その状況にさせないこと。あえて先生たちがゆったり過ごすとか、子ども同士をそばに置かないとか具体的に離す。言い聞かせても無理。先生は仲がいいからと、放っておいても無理。そういう状況を作らないとかをするといい。ドイツとかは防ぐためか、年長までおしゃぶりをさせたりしていた。日本はあまりしない。ドイツでは、年長でもお散歩をしていても、おしゃぶりをしているのを見たことがある。一番は集団の中のストレスがあるので、ざわざわ、わさわさしている時に起きるので、ゆったり過ごすと私の園では少なくなった。どんな状況の誰かを調べることだと思います。ドイツでは床にふわふわしているものを置く。ミラーボールのようなもの、クリスマスに使うような電飾がちかちかしたりする部屋がある。あとは、絹のようなスカーフを置く部屋も作ったりして、気持ちを落ち着かすことも意図して行っている。癒しのコーナーなども用意している。

【食育（食事)】

偏食が多い子がクラスに１名いて、最初の頃は皿に入った少量の野菜を食べていたが、今では肉・魚といった好みのものしか食さない。（野菜が間食できるように、魚・肉を半分にしラップに包んで、野菜を食べたらおかわりを渡していた。）家庭では野菜嫌いに困っており、家庭でも食べない。給食の先生にもアプローチをかけ、「食べてくれなくて悲しい」等、声を掛けたが、伝わっていない。無理強いはさせたくないので嫌がったら終わりにしている。役所にも相談している。園で子どもにどうアプローチをしていけばいいのか教えてほしいです。

偏食は困りますがどういう野菜か分からないが、生野菜は給食ではないと思うが、私の子どもの頃はなくて温野菜が中心だった。キュウリやトマトは食べていたが、生野菜は最近の健康で食文化の問題もあるが、ヨーロッパは、野菜はほとんど食べない。じゃがいもくらい。ホテルで困るのは、肉ばかりで繊維物がなくて便秘になる。子どもたちも欧米化しているのかなと思う。牛乳は日本人の腸には合わないと言われて、分解できないと言われ下痢をすることが多い。その国の文化、一時期オリーブオイルがいいと言われていたがギリシャなどでしか効かないと言われ、腸とかの違いもあるので、今の子は欧米化してきているが色々なものを食べてもらいたいと思っている。目の前で美味しく食べることが一つと、その栄養を他の食材で摂れるならそれに越したことはない。例えば、ピーマンを食べてビタミンＣを摂らせたいと思ったら、イチゴでも摂れる。例えば、10 の姿の発表をしたうちの職員の森口君や調理の先生も嫌いで食べないが、栄養で食べているわけではなく、美味しいから食べているので、美味しいもので食べたらいいのではと思ってしまう。給食では１種類しか摂れないので、家庭では他の栄養価で食べれるようにした方がいい。それが嫌いならほかの栄養素で摂るように伝える。見た目や食感で嫌だという人もいるが、トマトのヌルヌルが嫌という人がいるが、ケチャップは食べるという人もいる。工夫してやってあげることが必要かもしれない。給食会議で１回食べて残菜が残った時にどうするかを検討して、２回目にしている。黒ゴマは食べないけど白ゴマで食べることはある。色々な工夫をして話してみるといい。だからと言って、無理強いしても栄養にならないので、目の前で美味しそうに食べるとか、嫌いな人は何があってもダメだが工夫をするといい。私の孫も本人が好き好んで、好き嫌いをしているわけでもないので、そういう手伝いをしてあげる。食べさせなきゃではなく、どうやったらいいかのスタンス位でいいと思う。

【食育（食事)】

２歳児クラスのセミバイキングを具体的に知りたいです。

特におかわりの時はどのように行っているのでしょうか。

母乳のときの問題だが、私の子どもが二人いるが 100%母乳だったのでミルクをあげたことがない。予備で瓶を買ったことがあったが、使ったことはない。その時に不思議だったのが、飲み始めは泣くので分かるのだが、いつ飲み終わるのだろうというのが不思議だった。自分から口を離す。その時にどのくらい飲んでいるか分からないけど、そこで終わりにする。それを哺乳瓶で自分で口から離してもそこで終わりにせず、最後まであげようとする。母乳ではそんなこと言ったことない。まだ残っているからとは言わない。赤ちゃんは自分で飲む量が分かっていると言われている。食べる量も自分で分かっていると言われている。哺乳瓶の時にもっと飲めとか、まだ残ってい

る。飲みたいのにもうないからダメと、大人がコントロールしてしまうと、本人がどれくらい飲めばいいか判断する能力がなくなってくる。セミバイキングをしても、その量が分からなくなってしまう。それをチェックするのは体重測定をして見た目一杯食べているかではなく、ちゃんと伸びているかを見るべき。母乳の量が違っても、増える量が一定だったらしい。ちゃんと伸びているかをチェックしていく。食べている量で一喜一憂しないこと。自分でまだ言えないことがある。量を把握できていない可能性もあるので、うちの場合は全員よそって減らすかしている。シールで一杯ちょっとで貼ってとか、大きい小さいかが分かるか、セミバイキングで「セミ」とつけたが、ホテルのようなバイキングは食べたいものを食べたい量を摂っているが、自分で食べたい量を摂るだけでなく、人に伝える。自分の気持ちや要望を口で伝える練習が入っている。言うことが必要と言うこと、黙ってよそることではなく、言わせることが大事。大人しい子でも、少なくても給食の時にどのくらいと言わないといけないので、セミバイキングとしている。2 歳のクラスから少しずつどれくらい食べたいか、何をしたいかを言えるようなことに関係してくる。おかわりももっと食べるかどうか。自分はこれで足りるのかどうか。自分で練習するのは 2 歳児。足りない場合はおかわりというようにする。足りない時にはおかわり、「もっと」と言ったら増やすことだよと、そういうことを教えていくのは 2 歳の頃。口で伝えるように練習していくことが 2 歳だと思っているので、自分の口で言えるようにしていく。

【行事】

生活発表会のようなものはありますか？あるとしたらどのようなことをしていますか？

生活発表会はある。うちの場合はお楽しみ会と言うが、目的の一つは発達を伝えることで、言語と表現の発表をしている。言語は劇、表現の 2 つを伝える役割がある。呼ばれたら返事をするのは言語領域にあるとしたら、名前を舞台の上で返事をするところを見せる。合奏や歌もある。小学校でも合唱や合奏がある。学年ごとに出来るようになると書かれている。教科ごとに音楽メロディー音を弾けるようにすることが生活発表会だが、幼児期は「〜〜を楽しむ」、「〜〜味わう」ことが目標になるので、音を出すことを楽しんでいることが発表会なので、楽しんでいることが生活発表で、小学校で出来るようになるための基礎だから、まず楽しまなければいけない。嬉しそうに楽器を弾いていたり、自分のことを味わったり、音楽の先生の志村先生は大声で歌うことは意味がないという。自分の声を味わったり、みんなの声を聴くことが発表会。劇もあるが表現の発達だが、練習をすることもある。私の園では 3,4,5 歳いるので生活発表会は年度ごとにする。なので、年長だけで劇をするが、年長だけは自分たちで台本を作ってセリフを作る。色々な役割があるので、どんどん振り付けも考えるが、3,4,5 歳の部屋の中でするので 3,4 歳が見ている。観たい子たちは年長がやっている姿を見る。そうすると 4 歳児が 5 歳になった時に絵本を選んで、踊りを決め始める。劇の間近かになると、なるべく散歩に行って、本番を楽しめるようにしている。色々な工夫をして当日をベストにするために合唱が予行練習を見て「何か下手だね」と言ったら、今日のうたは本番で歌う歌ではないと言われ、イントロクイズをして一番知らない歌にしたから自信なさげに歌ったから下手でした。本番は一番好きな歌だから大声で歌うでしょうと言ったり、去年は 3 歳の 3 匹の子ブタの練習で、オオカミを懲らしめて煙突で鍋でやけどさせるシナリオだが、子どもたちがかわいそうだということで、いい湯にしてお風呂にしようとし

て予行練習をした。ちょうどいい湯にしようとフーフーした。「あれ、冷たい！冷やし過ぎたでしょう？」、加減しすぎて暑過ぎとしたり、本番はちょうどいいとした。劇遊びをして楽しむことが翻意なので、楽しんで劇遊びをしたり、本番に見せることなので行事もする。そういう時は学年別にする。他の行事でもみんなそう。子どもたちにもし行事がなかったら、子どもたちはつまらないと思う。昔は毎日お百姓さんでつまらないので、村祭りがあった。地域に阿波踊りがあるとか、神楽があるのはそのために毎日練習する。練習が悪いことではない。それは本人の意思で楽しくて当日ちゃんと見せようと思って連取するので子どもにそう持っていくなら悪くない。子どもたちが本番に見せようと思って練習することは悪くない。だけど自分からするように先生が持っていくことが必要だと思います。園は色々な行事があり、今月うちの園では、夕涼み会があって準備をしている。うちは親子で楽しむことを目的にしているので、親が店を出したいと言われたときに、親に店は出さないでと言っている。それから制作コーナーがある。成長展にも制作コーナーがあって、成長展は子どもが制作するところを親が見て、こんなことができるという成長を感じられるようにしているのが制作コーナー。夕涼み会の制作コーナーは、親子で夕方に一緒に制作をして楽しむこと。そのためにテーマがあり、今年は日本がテーマで、漫画や子どもの絵本が舞台になっている。先生たちも楽しんでワクワクしているので、子どもたちも当日を楽しみにしている。ノルマかのようにするのではなく、色々な行事に子どもと一緒になってワクワクする必要があるのでいろいろな工夫をしてみてください。

本稿は、2018 年 7 月 10 日に行われた第 47 回保育環境セミナーの「Q＆A」の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）